

二天自作の銅細工

「武蔵の剣」



銅製の柄の部分に、子が母を背負う図が彫られている

一天、またの名を宮本武蔵。生涯負け知らずの剣聖であると同時に、優れた芸術家でもあった彼の名を知らぬ人は希だろう。それでは、「宮本武蔵」という名の駅が存在するのをご存じだろうか？岡山県の東、兵庫県の境に位置する大原町。ここに智頭急行線「宮本武蔵駅」は実在する。武蔵の出生地については諸説あるが、

吉川英治の小説のなかで武蔵の故郷として描かれている大原町は、駅名をはじめとしてみさに「宮本武蔵」一色である。なかでも人気の「武蔵資料館」には、直筆の「達磨頂相図」やさまざまな工芸品、刀などがずらりと展示され、武蔵の多彩な才能を楽しませてくれるのだ。ゆつくりと目を移していくと、…あった！ どうしても一度この目で見なかった

目的の物が、いま目の前にある。「瓢箪鯨鐺」。武蔵自作の銅製の鐺である。山金に近い素銅を用い、表裏共に上から下にかけて彫り出された瓢箪に鯨が絡みあう図柄。鯨の口の周辺には毛彫りが施され、小さな目が何とも愛らしい。この小さな銅製の鐺が、幾たび武蔵を敵の刃から守ってきたのかと想像すると、そこに刻まれた小さな傷のひとつつ

も神秘的なものに見える。

ふと目の端に飛び込んできた先を追うと、そこには一本の小柄が陳列されている。「見何の変哲もない小柄だが、興味深かいのは、銅製の柄に刻み込まれた模様だ。子が母を背負う姿である。もしか、母を背負う男は武蔵自身か。であるならば、彼は何を思いながらこの図を刻んでいったのだろう…。素銅を前に二心に彫刻を施す武蔵の姿が浮かんでくる。

武蔵の里を訪ねたら、ぜひ「決闘巖流島」の観光寸劇鑑賞をおすすめしたい。つ種類かしのすると、この寸劇の武蔵役を演ずるのは大原町

役場の職員だ。武蔵になりきったその勇姿からは、「宮本武蔵」に寄せるこの町の並々ならぬ意気込みを感じ取ることができよう。



銅製の「瓢箪鯨鐺」は武蔵自作。鯨の小さな目が味のある表情を醸し出している



智頭急行線の駅名もスバル「宮本武蔵」



町内のマンホールのふたにも瓢箪鯨鐺が。町全体が武蔵一色



「武蔵資料館」には武蔵ゆかりの品々が多数展示されている